浮舟

泉鏡花

青空文庫

一

「浪花江の片葉の蘆の結ぼれかかり――よいやさ。」

と蹌踉として、

「これわいな。……いや、どっこいしょ。」

脱いで提げたる道中笠、一寸左手に持換えて、紺の風呂敷、桐油包、振分けの荷を両方、蝙蝠の憑物めかいて、振落しそうに掛けた肩を、自棄に前に突いて最一つ蹌踉ける。

「……解けてほぐれて逢う事もか。何を言やがる。……此方あ可い加減に溶けそうだ。……まつにかいあるヤンレ夏の雨、かい……とおいでなすったかい。」

さっと沈めた浪の音。磯馴松は一樹、一本、薄い枝に、濃い梢に、一ツずつ、翠、淡紅色、絵のような、旅館、別荘の窓灯を掛連ね、松露が恋に身を焦す、紅提灯ちらほらと、家と家との間を透く、白砂に影を落して、日暮の打水のまだ乾かぬ茶屋の葭簀も青薄、婦の姿もほのめいて、穂に出て招く風情あり。此処は二見の浦づたい。

真夏の夜の暗闇である。この四五日、引続く暑さと云うは、日中は硝子を焼くが如く、嚇と晴れて照着ける、が、夕凪とともに曇よりと、水も空も疲れたように、ぐったりと雲がだらけて、煤色の飴の如く粘々と掻曇って、日が暮れると墨を流し、海の波は漆を畝らす。これでい

て今夜も降るまい。癖に成って、一雫の風を誘う潮の香もないのであった。

男は草鞋穿、脚絆の両脚、しゃんとして、恰も一本の杭の如く、松を仰いで、立停って、……眦を返して波を視た。

「ああ、唄じゃねえが、一雨欲しいぜ……」

俄然として額を叩いて、

「慌てまい。六ちゃん、いや、ちゃんと云う柄じゃねえ。六公、六でなし、六印、月六斎でいやあがら。はははは。」

肩を刻んで苦笑いして、またふらふらと砂を踏み、

「野宿に雨は禁物でえ。」

その時躓く。……

「これわいな！　慌てまいとはこの事だ。はあ、松の根ッ子か。この、何でもせい。」

岸辺の茶屋の、それならぬ、渚の松の舫船。——六蔵は投遣りに振った笠を手許に引いて、屈腰に前を透かすと、つい目の前に船首が見える。

船は、櫂もなく艪もなしに、浜松の幹に繋いで、一棟、三階立は淡路屋と云う宏壮な大旅館、一軒は当国松坂の富豪、池川の別荘、清洒なる二階造、二見の浦の海に面した裏木戸の両の間、表通りへ抜路の浜口に、波打際に引上げてあった。

夫女巌へ行くものの、通りがかりの街道から、この模様を視めたら、それも名所の数には洩

れまい。舷に鰡は飛ばないでも、舳に蒼い潮の鱗。船は波に、海に浮べたかと思われる。……が藍を流した池のような浦の波は、風の時も、渚に近いこの船底を洗いはせぬ。戯にともづなの舫を解いて、木馬のかわりにぐらぐらと動かしても、縦横に揺れこそすれ、洲走りに砂を辷って、水に攫われるような憂はない。

気の軽い、のん気な船は、件の別荘の、世に隔てを置かぬ、ただ夕顔の杖ばかり、四ツ目に結った竹垣の一重を隔てた。濡縁越の座敷から聞え来る三味線の節の小唄の、二葉三葉、松の葉に軽く支えられて、流れもあえず、絹のような砂の上に漂っているのである。

二

「この何でもせい。……住吉の岸辺の茶屋に、よいやさ。」

と風体、恰好、役雑なものに名まで似た、因果小僧とも言いそうな這奴六蔵は、その舷に腰を掛けた、が、舌打して、

「ちょッ面倒だ。宿銭は鐚でお定り、それ、」

と笠を、すぽりと落し、次手に振分の荷を取って、笠の中へ投げ込んで、

「いや、お泊りならばァ泊らんせ、お風呂もどんどん湧いている、障子もこの頃はりかえて、畳もこの頃かえてある。——嘘を吐きゃあがれ。」

空手を組んで、四辺を見たが、がツくりと首を振って、

「待てよ……青天井が黒光りだ。電は些と気が無えがね、二見ヶ浦は千畳敷、浜の砂は金銀…

…だろう、そうだろそうだろ然うであろ。成程どんどん湧いていら、伊良子ヶ崎までたっぷり

だ。ああ、しかし暑いぜ。」

腕まくりを肩までして、

「よく皆、瓦の下の、壁の裡へ入ってやがる。」

瓦の下、壁の裡、別荘でも旅館でも、階下も二階もこの温気に、夕凪の潮を避け、南うけに

座を移して、伊勢三郎が物見松に、月もあらば盗むべく、神路山、朝熊嶽、五十鈴川、宮川の

風にこがれているらしい。ものの気勢も人声も、街道向は賑かに、裏手には湯殿の電燈の小暗

きさえ、燈は海に遠かった。

六蔵ニヤニヤと独笑して、

「お寝間のお伽もまけにしてと――姉さん、真個かい、洒落だぜ洒落だぜ洒落じゃねえ。入ら

っしゃい、お一方、お泊でございますよ。へい、お早いお着様で、難有う存じます。これ、御

濯足の水を早くよ。あいあい、とおいでなさる。白地の手拭、紅い襷よ……柔な指で水と来り

や、俺あ盥で金魚に化けるぜ。金魚うや、金魚う。」

と可い気な売声。

「はてな、紺がすりに、紺の脚絆、おかしな色の金魚だぜ。畜生め、鯰じゃねえか。刎ねる処

は鮒だ奴さ。鮒だ、鮒だ、鮒侍だ。」

と胸を揺って、ぐっと反ったが、忽ち肩ぐるみ頭をすくめて、

「何を言やあがる。」

で、揚あしを左の股、遣違いにまた右て。燈は遠し、手探りを、何の気もなく草鞋を解いて、びたりと揃えて、トンと船底へ突込むと、殊勝な事には、手拭の畳んで持ったをスイと解き、足の埃をはたはたと払って、臀で楫を取って、ぐるりと船の胴の間にのめり込む。

「御案内引あいあい……」

と自分で喚き、

「奥の離座敷だよ、……船の間——とおいでなすった。ああ、佳い見晴、と言いてえが、暗くツて薩張分らねえ。」

勝手な事を吐くうちに、船の中で胡坐に成った。が兎が櫂を押さないばかり、狸が乗った形である。

「何、お風呂だえ、風呂は留めだ。こう見えても余り水心のある方じゃねえ。ははは、湯に水心も可笑いが、どんどん湧いてるは海だろう。——すぐに御膳だ。膳の上で一銚子よ。分ったか。脱落もあるめえが、何ぞ一品、別の肴を見繕ってよ、と仰せられる。」

と仰せられ、

「ああ、いい酒だぜ、忠兵衛のおふくろかい、古い所で……妙燗妙燗。」

と二つばかり額を叩く。……暢気さも傍若無人で、いずれ野宿の、ここに寝てしまうつもりでいよう。舫船を旅籠とより、名所を座敷にしたようなことを吐す。が。僅か一時ばかり前、この町通り、両側の旅籠の前を、うろついて歩行いた折は、早や日も落ちて、脚にも背にも、放浪の陰の漾った、見るからみじめな様子であった。

三

黄昏に、御泊を待つ宿引女の、廂はずれの床几に掛けて、島田、円髷、銀杏返、撫つけ髪の夕化粧、姿を斜に腰を掛けて、浅葱に、白に、紅に、ちらちら手絡の色に通う、団扇の絵を動かす状、もの言う声も媚かしく傾城町の風情がある。

浦づたいなる掃いたような白い道は、両側に軒を並べた、家居の中を、あの注連を張った岩に続く……、松の蒔絵の貝の一筋道。

氷店、休茶屋、赤福売る店、一膳めし、就中、鵯の鳴くように、けたたましく往来を呼ぶ、貝細工、寄木細工の小女どもも、昼から夜へ日脚の淀みに商売の逢魔ヶ時、一時鳴を鎮めると、出女の髪が黒く、白粉が白く成る。

優い声で、

「もし、お泊りかな。」

「お泊りやすえ。」
彼方でも、お泊りやす、此方でも、お泊りやす、と愛嬌声の口許は、松葉牡丹の紅である。
「泊るよ。」
其処へ、突掛けに　紺がすりの汗ばんだ道中を持って行くと、
「はい、お旅籠は上中下と三段にございますがな、最下等にいたしましても……」
何うして、こんな旅籠へ一宿出来よう、服装を見ての口上に違いないから。
「何だ。無価泊めようと云うのじゃねえのか。」
「外を聞いておくんなはれ。」
「指揮は受けねえ。」と肩を揺って、のっさり通る。
「お泊りやす。」
「俺か。」とまたずっと寄る。
「否、違いまんの。」
「状あ見ろ、へへん。」
と、半分白い目で天を仰いで、拗ねたようにそのまま素通。
この辺とて、道者宿、木賃泊りが無いではない。要するに、容子の好い婦人が居て、夕をほの白く道中を招く旅籠では、風体の恁の如き、君を客にはしないのである。
荷も石瓦、古新聞、乃至、懐中は空っぽでも、一度目指した軒を潜って、座敷に足さえ踏

掛くれば、銚子を倒し、椀を替え、比目魚だ、鯛だ、と贅を言って、按摩まで取って、ぐっすり寝て、いざ出発の勘定に、五銭の白銅一個持たないでも、彼はびくとも為るのではなかった。

針が一本――魔法でない。

この六でなしの六蔵は、元来腕利きの仕立屋で、女房と世帯を持ち、弟子小僧も使った奴。酒で崩して、賭博を積み、いかさまの目ばかり装った、己の名の旅双六、花の東都を夜遁げして、神奈川宿のはずれから、早や旅銭なしの食いつめもの、旅から旅をうろつくこと既にして三年越。

右様の勘定書に対すれば、洗った面で、けろりとして、

「おう、仕立ものの用はねえか。羽織でも、袴でも。何にもなきゃ経帷子を縫って遣ら。勘定は差引だ。」

女郎屋の朝の居残りに遊女どもの顔を剃って、虎口を遁れた床屋がある。――それから見れば、旅籠屋や、温泉宿で、上手な仕立は重宝で、六の名は七同然、融通は利き過ぎる。

尤も仕事を稼ぎためて、小遣のたしにするほどなら、女房を棄てて流浪なんかしない筈。

からっけつの尻端折、笠一蓋の着たッ切雀と云うも恥かしい阿房鳥の黒扮装で、二見ヶ浦に塒を捜して、

「お泊りだ、お一人さん――旅籠は鐚でお定り、そりゃ。」と指二本、出女の目前へぬいと出す。

誰が対手に成るものか、黙って動かす団扇の手は、浦風を軒に誘って、背後から……塩花塩花。

四

六は門並六七軒。

風体と面構で、その指二本突出して、二両を二百に値切っても、怒って喧嘩はしないけれど、誰も取合うものはなし。

いざ、と成れば、法もかく、手心は心得たが、さて指当って、腹は空く、汗は流れる、咽喉は乾く、氷屋へ入る仕覚も無かった。

すねた顔色、ふてた図体、そして、身軽な旅人の笠捌きで、出女の中を伸歩行く、白徒の不敵らしさ。梁山泊の割符でも襟に縫込んでいそうだったが、晩の旅籠にさしかかった飢と疲労は、……六よ、怒るなよ……実際余所目には、ひょろついて、途方に暮れたらしく可哀に見えた。

この後を、道の小半町、嬉しそうに、おかしそうに、視め視め、片頬笑みをしながら跟いて歩行いたのは、糊のきいた白地の浴衣に、絞りの兵児帯無雑作にぐるりと捲いた、耳許の青澄んで見えるまで、頭髪の艶のいい、鼻筋の通った、色の浅黒い、三十四五の、すっきりとした

男で。何処にも白粉の影は見えず、下宿屋の二階から放出した書生らしいが、京阪地にも東京にも人の知った、巽辰吉と云う名題の俳優。

で、六が砂まぶれの脚絆をすじりもじって、別荘の門を通ったのと、一足違いに、彼は庭下駄で、小石を綺麗に敷詰めた、間々に、濃いと薄いと、すぐって緋色なのが、やや曇って咲く、松葉牡丹の花を拾って、その別荘の表の木戸を街道へぶらりと出た。

巽は時に、酔ざましの薬を買いに出たのであった。

客筋と云うのではない、松坂の富豪池川とは、近い血筋ほどに別懇な親類交際。東に西に興行の都度、日取の都合が付きさえすれば、伊勢路に廻って遊ぶのが習いで、別けて夏は、三日なり二日なり此処に来ない事はないのであった。

今度も、別荘の主人が一所で、新道の芸妓お美津、踊りの上手なかるたなど、取巻大勢と、他に土地の友だちが二三人で、昨日から夜昼なし。

向う側の官営煙草、兼ねたり薬屋へ、ずっと入って巽が、

「御免よ。」

「はい、お出でなさいまし。」

唯、側対いの淡路屋の軒前に、客待うけの円髷に突掛って、六でなしの六蔵が、（おい、泊るぜえ）を遣らかす処。——考えても——上り端には萌黄と赤と上草履をずらりと揃えて、廊下の奥の大広間には洋琴を備えつけた館と思え——彼奴が風体。

傍見をしながら、
「宝丹はありますかい。」
「一寸、ござりまへんで。」
「無い。」
「左様で、ござりません。仁丹が可うござりますやろ。」と夕間暮の薬箪笥に手を掛ける、とカチカチと鳴る環とともに、額の抜上った首を振りつつ大な眼鏡越にじろりと見る。
「宝丹が欲しいんだがね。」
「強い、お生憎様で。」
「お邪魔を。」
「何うだ、姉え、これだけじゃ。」
六は再指二本。
この、笠ぐるみ振分けを捲り手の一方へ、褌も見える高端折、脚絆ばかりの切草鞋で、片腕を揮ったり、挙げたり、鼻の下を擦ったり、べかこと赤い目を剥いたり、勝手に軒をひやかして、ふらふらと街道を伸して行くのが、如何にも舞台馴れた演種に見えて、巽はうかうか独笑してその後に続いたのである。

五

やがて一町出はずれて、小松原に、紫陽花の海の見える処であった。

「君、君。」

何と思ったか、巽がその六でなしを呼んだのである。

「ええ、手前で、へい。」と云うと、ぎっくり腰を折って、膝の処へ一文字に、つん、と伏せた笠の上、額を着けそうにして一ツおじぎをした工合が、丁寧と言えば丁寧だが、何とも人を食った形に見える。

辰吉は片頬笑して、

「突然で失礼ですがね、何処此処と云ってるよりか、私の許へ泊っちゃ何うです。」

「へい、貴方へ。」と、俯向けていた地薄な角刈の頭を擡げて、はぐらかす気か、汗ばんだか、手の甲で目を擦って、ぎろりと巽の顔を見た。

「何うです、泊りませんか……ッたってね、私も実は、余所の別荘に食客と云うわけだが、大腹な主人でね、戸締りもしない内なんだから、一晩、君一人ぐらい、私が引受けて何うにもしますよ。」

「へええ、御串戯を。」と道の前後を※して、苦笑いをしつつ、一寸頭を掻いたは、扨は、我が挙動を、と思ったろう。

「串戯なもんですか。」

其処が水菓子屋の店前で――巽は、別に他に見当らなかったので、――居合す小僧に振向いて、最う一軒薬屋はないか、と聞いて、心得て出て、更めて言った。

「真個だよ、君。」

と笑いながら、……もう向うむいて行きかける六蔵を再呼んで、

「……今君が通って来た、あの、旭館と淡路屋と云う大な旅館の間にある、別荘に居るんだからね。」

「何とも難有え思召で、へい。」

と、も一度笠を出して面を伏せて、

「いずれまた……」

「ではさようなら。」

「御機嫌よろしゅう。」

二見ヶ浦を西、東。

思いも掛けない親船に、六はゆすぶった身体を鎮めて、足腰をしゃんと行く。

「兄さん、兄さん。」

「親方。」

と若い女が諸声で、やや色染めた紅提灯、松原の茶店から、夕顔別当、白い顔、絞の浴衣が、飜然と出て、六でなしを左右から。

「親方。」
「兄さん。」
「ええ、俺が事か。兄さん、とけつかったな。聞馴れねえ口を利きやあがる。幾干で泊める。こう、旅籠は幾干だ。」
「否、宿屋じゃありません。まあ、お掛けなさいな。」
「よう一寸。」
「何にも持たねえ、茶代が無えぜ。」
「何んですよ、そんな事は。」
「はてな、聞馴れねえ口を利きやあがる。」
「その代りね、今、親方、其処で口を利いたでしょう。」
「一寸、あの方は何と云って。矢張り普通の人間とおんなじ口の利き方をなさる事？　一寸さあ……」
と衣紋を抜く。
六蔵解めぬ面の眉を顰め、
「何だ、人間の口の利方だ？……ほい、じゃ、ありゃ此処等の稲荷様か。」
「まあ！」
「何だい？」

「あら、名題の方じゃありませんか、巽さんと云う俳優だわよ。」
「畜生め、此奴等、道理で騒ぐぜ。むむ、素顔にゃはじめてだ。」
と、遠くを行く辰吉のすらりとした、後姿に伸上る。
「可いわねえ。」と、可厭な目色。
「黙ってろ。俺もこう見えて江戸児だ。巽の仮声がうめえんだ。……」
「あら、嬉しい。ひい！」と泣声を放ったり。
「馳走をしねえ、聞かして遣ら。二見中の鮑と鯛を背負って来や。熱燗熱燗。」と大手をふった。
これじゃ頓て、鼻唄も出そうである。

六

「もしもし、貴方。」
と媚かしい声。
溝端の片陰に、封袋を切って晃乎とする、薬の錫を捻くって、伏目に辰吉のそんだ容子は、片頬に微笑さえ見える。四辺に人の居ない時、こうした形は、子供が鉄砲玉でも買って来たように、邪気無いものである。

水菓子屋で聞いた薬屋へ行くには、彼は、引返して別荘の前をまた通らねば成らなかった。それから路を折曲って、草生の空地を抜けて、まばら垣について廻って、停車場方角の、新開と云った場末らしい、青田も見えて藁屋のある。その中に、廂に唐辛子、軒に橙の皮を干した、……百姓家の片商売。白髪の婆が目を光らして、見るなよ、見るなよ、と言いそうな古納戸めいた裡に、字も絵も解らぬ大衝立を置いた。

宝丹は其処にあったが、不思議に故郷に遠い、旅にある心地がして、巽はふと薄い疲労さえ覚えた。道もやがて別荘の門から十町ばかり離れたろう。

右から左に弁ずる筈を、こうして手に入れた宝丹は、心嬉しく、珍らしい。

「あの、お薬をめしあがりますなら、お湯か何ぞ差上げますわ。」

唯、片側の一軒立、平屋の白い格子の裡に、薄彩色の裙をぼかした、艶なのが、絵のように覗いて立つ。

黒髪は水が垂りそう、櫛巻の房りとした、瓜核顔の鼻筋が通って、眉の恍惚した、優しいのが、中形の浴衣に黒繻子の帯をして、片手、その格子に掛けた、二の腕透いて雪を欺く、下緊の浅葱に挟んで、――玉の惣の茶室を起った。――緋の袱紗、と見えたのは鹿子絞の撥袋。

片手に象牙の撥を持ったままで、巽に声を掛けたのである。

薬の錫を持ったなり、浴衣の胸に掌を当てて、その姿を見たが、通りがかりの旅人に、一夜を貸そうと云った矢先、巽は怪む気もしないで、

「恐入りますな。」

「さあ何うぞ。」

と云って莞爾した。が、撥を挙げて靨を隠すと、向うむきに格子を離れ、細りした襟の白さ、撫肩の媚かしさ。浴衣の千鳥が宙に浮いて、ふっと消える、とカチリと鳴る……何処かに撥を置いた音。

すぐに、上框へすっと出て、柱がくれの半身で、爪尖がほんのりと、常夏淡く人を誘う。

巽は猶関わず格子を開けた。

「じゃあ御免なさいよ。」

と、土間に釣った未だ灯を入れない御神燈に蔦の紋、鶴沢宮歳とあるのを読んで、ああ、お師匠さん、と思う時、名の主は……早や次の室の葭戸越、背姿に、薄りと鉄瓶の湯気をかけて、一処浦の波が月に霞んだようであった。

「恐入ります。」

婦は声を受けて、何となく、なよやかな袖を揺がしながら、黙って白湯を注いでいる。

「拝借します。」

と巽は其処の上框へ。

二つ三つ、すらすらと畳触り。で、遠慮したか、葭戸の開いた敷居越に、撓うような膝を支いて、框の隅の柱を楯に、少し前屈みに身を寄せる、と繻子の帯がキクと鳴る、心の通う音で

ある。

「温湯にいたしましたよ、水が悪うございますから。」

「……御深切に。」

取った湯呑は定紋着、蔦を染めたが、黄昏に、薄りと蒼ずむと、宮歳の白魚の指に、撥袋の緋が残る。

「ああ、私。」と、ばらりと落すと、下褄の端にちらめいて、瞼に颯と色を染めた、二十三四が艶なる哉。

七

「私、何うしたら可いでしょう。極りが悪うござんすわ。」

と婦は軽く呼吸を継いで、三味線の糸を弾くが如く、指を柱に刻みながら、

「私、お知己でもないお方をお呼び申して、極りが悪いものですから、何ですか、ひとりで慌てしまって、御茶台にも気が付きません。……そんな自分の湯呑でなんか。……失礼な、……まあ、何うしたら可うございましょうね。」

と襟を圧えて俯向いて、撥袋を取って背後に投げたが、留南奇の薫が颯として、夕暮の奇しき花、散らすに惜しき風情あり。辰吉は湯呑を片手に、

「何うしまして、結構です。難有う。そしてお師匠さん。貴女の芸にあやかりましょう。」

「存じません。」

と、また一刷毛瞼を染めつつ、

「人様御迷惑。蚊柱のように唸るんでございますもの、そんな湯呑には子子が居ると不可ません。お打棄りなさいましよ。唯今、別のを汲替えて差上げますから。」と片手をついて立構す。

辰吉は圧えるように、

「ああ、しばらく。貴女がそんな事をお言いなすっちゃ私は薬が服めなく成ります。この図体で、第一、宝丹を舐めようと云う柄じゃないんですもの。鯱や鯨と掴合って、一角丸を棒で噛ろうと云うまどろすじゃありませんか。」

婦が清い目で、口許に嬉しそうな笑を浮べ、流眄に一寸見て、

「まあ、そうしてお商売は、貴方。」

「船頭でさあね。」

「一寸！　池川さんのお遊び道具の、あの釣船ばかりお漕ぎ遊ばす……」

お師匠さんは御存じだ。

「雑と、人違いですよ。」と眦を伏せてぐっと呑んで、

「申兼ねましたが、もう一杯。丁ど咽喉が渇いて困っていた、と云う処です。」

艶なお師匠さんは、いそいそして、
「お出ばなにいたしましょうね。」
「薬を服みました後ですから、お湯の方が結構です——何ですか、お稽古は日が暮れてからですか。ああ、いや、それで結構。」
辰吉は錆のある粋な笑で、
「ははは、些と厚かましいようですな。」
「沢山おっしゃいまし。——否、最う片手間の、あの、些少の真似事でございます。」
「お呼び申せば座敷へも……？」
「可厭でございますねえ、貴方。」
と片手おがみの指が撓って、
「そんな御義理を遊ばしちゃ、それじゃ私申訳がありません。それで無くってさえ、お通りがかりをお呼び申して、真個に不躾だ、と極りが悪うございましてね、赫々逆上ますほどなんですもの。」
身を恥じるように言訳がましく、
「実は、あの、小娘を買ものに出しまして、自分でお温習でもしましょうか、と存じました処が、窓の貴方、葱の露の、大きな雫が落ちますように、螢が一つ、飛ぶのが見えたんでございますよ……」

「蛍。」

と巽は、声に応じて言返した。

「はあ、時節は過ぎましたのを、つい、珍しい。それとも一ツ星の光るお姿か知ら、とそう思って立ったんですが、うっかり私、撥なんか持って、蛍だったら、それで叩きますつもりだったんでしょうかねえ。そんな了簡で、蛍なんて、蜻蛉か蝙蝠で沢山でございます。」

蜻蛉は寝たから御存じあるまい、軒前を飛ぶ蝙蝠が、べかこ、と赤い舌を出して、

「これは御挨拶だ。」

と飜然と行る。

八

「それですから、ふっと、その格子を覗きました時は、貴方の御手の御薬の錫をば、あの、蛍をおつかまえなすった、と見ましたんですよ。」

器は巽の手に光る。

彼は掌に据えて熟と視た。

「まあ、お塩梅が沢山悪いんじゃありませんか、何しろお上りなすって、お休みなさいましたら何うでしょう。貴方、御気分は如何です。」と、摺寄って案じ顔。

巽は眉の凜とした顔を上げて、
「否、気分は初めから然したる事も無いのです。宝丹は道楽に買った、と云って可いくらいなんですが。」
爾時、袂へ突込んで、
「今の、螢には、何だか少し今度は係合がありそうですよ——然うですか、螢を慕ってお師匠さん、貴女格子際へ出なすったんだ。」
「貴方のお口から、そんな事、お人の悪い、慕って、と云う柄じゃありません。」
「まあまあ……ですがね、私が宝丹を買いに出たはじまりが、矢張り螢ゆえに、と云ったような訳なんですよ。ふっと、今思出したんです……」
「へええ。」と沈んだような声で言う、宮歳は襟を合せた。
「今度、当地へ来ます時に、然うです。興津……東海道の興津に、夏場遊んでる友だちが居て、其処へ一日寄ったもんです。夜汽車が涼しいから、十一時過ぎでした、あの駅から上りに乗ったんですよ、右の船頭が。」
「……はあ、可うございます。ほほほ。」と笑が散らぬまで、そよそよ、と浅葱の団扇の風を送る。指環の真珠が且つ涼しい。
「頂戴しますよ。」
と出してあった薄お納戸の麻の座蒲団をここで敷いて、

「小さな革鞄一つぶら下げて、プラットホームから汽車の踏段を踏んで、客室の扉を開けようとすると、ほたりと。」

巽は口許の片頬を圧えて言ったのである。

「虫が来て此処へ留ったんです、すっと消え際の弱い稲妻か、と思いました。目前に光ったんですから吃驚して、邪険に引払うと、最う汽車が動出す。

妙にあとが冷つくのです、濡れてるようにね、擦って見ても何ともないので。

忘れていると、時々冷い。何か、かぶれでもしやしないかしら、螢だと思ったものの、それとも出合頭に、別の他の毒虫ででもありはしないかと、一度洗面台へ行って洗いましたよ。彼処で顔を映して見ても別に何事もないのです、そのうちに紛れてしまう。それでも汽車で、うとうとと寝た時には、清水だの、川だの、大な湖だの、何でも水の夢ばかり切々に見ましてね、繋ぎに目が覚める、と丁ど天龍川の上だったり、何処かの野原で、水が流れるように虫の鳴いてた事もありましたがね。最う別に思出しもしないで、つい先刻までそれ切りで済んでいました。

今しがたです……

池川さんの、二階で、」

と顔を見合せた時、両方で思わず頷く様な瞳を通わす、卜圧えた手を膝にして巽はまた笑を含んで、

「……釣舟にしておきましょう、その舟のね、表二階の方へ餉台を繋いで、大勢で飲酒ながら遊んでいたんですが、景色は何とも言えないけれど、暑いでしょう。この暑さと云ったら暑さが重石に成って、人間を、ずんと上から圧付けるようです。窓から見る松原の葭簀茶屋と酸漿提灯と、その影がちらちら砂に溢れるような緋色の松葉牡丹ばかりが、却って目に涼しい。海が焼原に成って、仕方がない、それじゃ生命も続くまいから、陸の方の青い草木を水にしておけ、と天道の御情けで、融通をつけて下さる、と云った陽気ですからね。」

「まあ、随分、ほほほ、もう自棄でございますわね、こんなに暑くっちゃ。」

その癖、見る目も涼しい黒髪。

九

「些とでも涼しい心持に成りたくツて、其処等の木の葉の青いのを熟と視ていて、その目で海を見ると、漸と何うやら水らしい色に成ります。

でないと真赤ですぜ。日盛なんざ火が波を打っているようでしょう。――さあ、然うなると不思議なもので今も言った通りです。潮煮の鯛の目、鮑の蒸したのが涼しそうで、熱燗の酒がヒヤリと舌に冷いくらい――貴女が云った自棄ですか――

夕方、今しがた一時は、凪の絶頂で口も利けない。餉台を囲んだ人の話声を、じりじりと響

くように思って、傍目も触らないで松原の松を見ていて、その目をやがて海の上にこう返すと、」

巽は目を離して指したが、宮歳の顔を見て、※びた声して低く笑った。

「ははは、ベッかっこをするんじゃありませんよ——。然うすると、海の色が朝からはじめて、颯と一面に青く澄んで、それが裏座敷の廻縁の総欄干へ、ひたひたと簾を流すように見えましてね、縁側へ雪のような波の裾が、すっと柔かに、月もないのに光を誘って、遥かの沖から、一よせ、寄せるような景色でした。

悚と涼しく成ると、例の頬辺が冷りとしました、螢の留った処です。——裏を透して、口の裡へ、真珠でも含んだかと思う、光るように胸へ映りました。」

敷居に凭れかかり、団扇を落して聞いていた婦は、膝の手を胸へ引いて、肩を細く袖を合せた。

「可厭な心持じゃなかったんです——それが、しかし確に、氷を一片、何処かへ抱いたように急に身を冷して、つるつると融るらしく、脊筋から冷い汗が流れました。香がします、水のような、あの、螢の。」

月の柳の雫でも夜露となれば身に染みる。

「私は何かに打たれたように、フイと席を立って戸外へ出ました。まだ明い。内の二階で、波ばかり、青く欄干にかかったようには、暮れてはいません。

名所図絵にありそうな人通りを見ていると、最う何もかも忘れました。が、宝丹は用心のために、柄にもない船頭が買ったんですが。

今の螢のお話で、無遠慮に御厄介に成りました。申訳にもと、思いますから、――私も、無理に附着けたらしいかも知れませんが、螢の留ったお話をしたんです。」

と半ば湯呑のあとを飲むと、俯目に紋を見て下に置いた。彼は帰りがけの片膝を浮かしたのである。

唯、呼吸を詰めて、

「貴方。」

「え。」

余り更まった婦の気に引入れられて驚いた体に沈んで云った。

婦は肩を絞るように、身をしめた手を胸に、片手を肱に掛けながら、

「螢じゃありませんわ。螢じゃありませんわ。」

「何がですえ。」

「そりゃ、あの……何ですよ、屹と……そして、その別荘のお二階へ、沖の方から来ましたって、……蒼い、蒼い、蒼い波は。」

柱の姿も蒼白く、顔の色も俤立って、

「お話を伺いますうちにも、私は目に見えますようで。そして、跡を、貴方の跡を追って浪打

際が、其処へ門まで参っているようですよ。」
と、黒繻子の帯の色艶やかに、夜を招いて伸上る。
白い犬が門を駈けた。
辰吉は腰を掛けつつ、思わず足を爪立てた。

十

「貴方、その欄干にかかりました真蒼な波の中に、あの撫子の花が一束流れますような、薄い紅色の影の映ったのを、もしか、御覧なさりはしませんか。」
……と云う、瞳の色の美しさ、露を誘って明いまで。その色に誘われて、婦が棄てた撥袋の鏡台の端に掛ったのを見た。
我にもあらず茫と成って、
「彼処に見える……あれですか。」
「否、あんなものじゃありません。」とやや気組んで言う。
「それでは？……」
「否、絽の色なんです。——あの時あの妓——は緋の長襦袢を着ていました。月夜のような群青に、秋草を銀で刺繍して、ちらちらと黄金の露を置いた、薄いお太鼓をがっくりとゆるくし

て、羅の裾を敷いて、乱次なさったら無い風で、美しい足袋跣足で、そのままスッと、あの別荘の縁を下りて、真直に小石の裏庭を突切ると、葉のまばらな、花の大きなのが薄化粧して咲きました、」と言う……

大輪の雪は、その褄を載せる翼であった。

「あの、夕顔の竹の木戸に、長い袂も触れないで、細りと出たでしょう。……松の樹の下を通る時は、遠い路を行くようでした。舟の縁を伝わると、あれ、船首に紅い扱帯が懸る、ふらふらと蹌踉たんです……酷く酔っていましたわね。

立直った時、すっきりした横顔に、縺れながら、島田髷も姿も据りました。

私はその時、隣家の淡路館の裏にあります、ぶらんこを掛けました、柱の処で見ていたんですよ、一昨年ですわね、——巽さん。」

と、然も震を帯びた声で、更めて名を呼んで、

「貴方に焦れて亡く成りました、あの、——小雪さん——の事ですよ。」

実に、それは、小雪は伊勢の名妓であった。

辰吉は、ハッと気を打って胸を退いた。片膝揚げつつ框を背後へ、それが一浪乗って揺れた風情である。

褄に曳いたも水浅葱、団扇の名の深草ならず、宮歳の姿も波に乗ってぞ語りける。

「不思議ですわね、あの時、海が迎いに来て、渚が、小雪さんに近く成ると、もう白足袋が隠

れました。蹴出しの褄に、藍がかかって、見渡す限り渚が白く、海も空も、薄い萌黄でござんした。

其処に唯一人、あの妓が立ったんです。笄がキラキラすると、脊の嫋娜とした、裾の色の紅を、潮が見る見る消して青くします。浪におされて、羅は、その、あの蹴出しにしっとり離れて、取乱したようですが、ああした品の可い人ですから、須磨の浦、明石の浜に、緋の袴で居るようでした。」

――驚破泳ぐ、とその時、池川の縁側では大勢が喝采した。――

「あれあれ渚を離れる、と浪の力に裾を取られて、羅のそのまんま、一度肩まで浸りましたね。衝と立つ時、遠浅の青畳、真中とも思うのに、錦の帯の結目が颯と落ちて、夢のような秋草に、濡れた銀の、蒼い露が、雫のように散ったんです。

まあ、顔が真蒼、と思うと、小雪さんは熟と沖を凝視めました、――其処に――貴方のお頭と、真白な肩のあたりが視えましたよ。

近所を漕いだ屋根舟の揺れた事！

貴方は泳いで在らしったんです。

真裸の男まじりに、三四人、私の知った芸者たちも五六人、ばらばらと浜へ駈けて出る。中には舫った船に乗って、両手を挙げて、呼んだ方もござんした、が、最うその時は波の下で、小雪さんの髪が乱れる、と思う。海の空に、珠の簪の影かしら、晃々一ツ星が見えました。」

十一

「その裸体なのは別荘の爺やさんでございましたってね。」

「さよう治平と云う風呂番です。」と言いながら、巽の面は面の如く瞳が据った。

灯なき御神燈は、暮迫る土間の上に、無紋の白張に髣髴する。

「爺さんが海へ飛込んで、鉛の水を掻くように、足掻いて、波を分けて追掛けましたわね。丁ど沖から一波立てて、貴方が泳返しておいでなさいます――

あとで、貴方がお話しなすッたって……あの、承りましたには、仰向けに成って、浪の下の小雪さんが、……嘸ぞ苦しかったでしょう、乳を透して絽の紅い、其処の水が桃色に薄りと搦んでいる、胸を細く、両手で軽く襟を取って、披けそうにしていたのが、貴方がその傍にお寄りなさいました煽りに、すっと立って、髷に水をかぶっていて、貴方の胸へ前髪をぐっちょり、着けました時、あの、うつくしい白足袋が、――丁ど咽喉の処へ潮を受けてお起ちなすった、――貴方の爪先へ、ぴたりと揃った、と申すじゃありませんか。」

巽は框をすっくと立った！

「……吃驚なすって、貴方は、小雪さんの胸を敷いて、前へお流れなさいましたってね。」

「そして驚いて水を飲んだ、今も一斉に飲むような気がします。」と云う顔も白澄むのである。

「其処を爺さんが抜切って、小雪さんを抱きました。ですけれども、最うその時、あの妓の呼

吸は絶えていたのです——あの日は、小雪さんは、大変にお酒を飲んでいたんですってね、茶碗で飲んで、杯洗まであけたんだそうですね。深酒の上に、急に海へ入ったもんですから、血が留ってしまったんでしょう。

そして、死体に成ってから、貴方のお胸に縋着いたんじゃありませんか、海の中で、」

と膝を寄せる、褄が流れて、婦は巽の手を取った。

指が触ると、掌に、婦の姿は頸の白い、翼の青い、怪しく美しい鳥が留ったような気がして、巽の腕は萎えたる如く、往来に端近な処に居ながら、振払うことが出来なかった。……四辺を見ると、次の間の長火鉢の傍なる腰窓の竹を透いて、其処が空地らしく幻の草が見えた。

「巽さん。」

「……」

「あの、風呂番の爺さんは、そのまま小雪さんを負い返して、何しろ、水浸しなんですから、すぐにお座敷へは、とそう思ったんでしょう。一度、あの松に舫った、別荘の船の中へ抱下しましたわね。雫に浜も美しい……小雪さんの裾を長く曳いた姿が、頭髪から濡れてしおしおと舷に腰を掛けました。あの、白いとも、蒼いとも玉のように澄んだ顔。紅も散らない唇から、すぐに、吻と息が出ようと、誰も皆思ったのが、一呼吸の間もなしにバッタリと胴の間へ、島田を崩して倒れたんです。

お浴衣じゃありましたけれど、其処にお帯と一所に。」

と婦は情に堪えないらしく、いま、巽の帯に、片頬を熟と。……一息して、

「貴方のお召ものが脱いで置いてありました。婦の一念……最うそれですもの。……螢はお迎いに行ったんですよ。欄干にかかりました二見ヶ浦の青い波は、沖から、逢いに来たんです。不便とお思いなさいまし。小雪さんは一言も何にも口へは出さないで、こがれ死をしたんです。

素振、気振が精一杯、心は通わしたでしょうのに、普通の人より、色も、恋も、百層倍、御存じの貴方でいて、些とも汲んでお遣んなさらない！——否、小雪さんの心は、よく私が存じております。——

俺は知らない、迷惑だ、と屹と貴方は、然うおっしゃいましょうけれど、芸妓したって、女ですもの、分けて、あんな、おとなしい、内気な小雪さんなんですもの、打ちつけに言出せますか。

察しておいで遊ばしながら、——いつも御贔屓を受けていましたものですから、池川さんの、内証の御寵妓でもあるようにお思いなすって、その義理で、……あれだけに焦れたものを、かなえてお遣んなさらない。……

堅気はそうじゃあござんすまい、こうした稼業の果敢い事は、金子の力のある人には、屹と身を任せている、と思われます。

御酒の上のまま事には、団扇と枕を寝かしておいて、釣手を一ツ貴方にまかして、二人で蚊

帳も釣りましたものを。」……と言う。

その蚊帳のような、海のような、青いものが、さらさらと肩にかかる、と思うと、いつか我身はまた框に掛けつつ、女の顔が弗と浮いて、空から熟と覗いたのである。

十二

「これが俳優なの。」

「まあ。」

しょろしょろ、浪が嬲るような、ひそひそと耳に囁く声。

松原の茶店の婦の、振舞酒に酔い痴れて、別荘裏なる舫船に鼻唄で踏反って一寝入りぐッと遣った。が、こんな者に松の露は掛るまい、夜気にこそぐられたように、むずむずと目覚めた六蔵。胴の間に仰向けで、身うちが冷える。唯、野宿には心得あり。道中笠を取って下腹へ当がって、案山子が打倒れた形でいたのが。——はじめは別荘の客、巽辰吉が、一夜の宿をしようと云った、情ある言を忘れず、心に留めて、六が此処に寝たのを知って、（船に苫を葺いてくれるのじゃないか。）と思った。

舷へ、かたかたと何やら嵌込む……

その嵌めるものは、漆塗の艶やかな欄干のようである、……はてな、ひそめく声は女である。

うまれながらにして大好物。寝た振でいて目を働かすと、舷に立かかって綺麗な貝の形が見える、大きな蛤。

それが、その貝の口を細く開いた奥に、白銀の朧なる、たとえば真珠の光があって、その影が、幽に暗夜に、ものの形を映出す。

「芸妓が化けたんだ、そんな姿で踊でも踊っていたろう。」

時に、そんなのが一個ではない。左舷の処にも立っている。これも同じように、舷へ一方から欄干らしいものを嵌めた、かたり、と響く。

外にもまだ居る……三四人、皆おなじ蛤の姿である。

「祭礼の揃かな、蛤提灯——こんなのに河豚も栄螺もある、畑のものじゃ瓜もあら。……茄子もあら。」

但しその提灯を持っているものの形は分らぬ。が、蛤の姿である……と云うのが、衣服、その袖、その帯と思う処がいずれも同じ蛤で、顔と見るのが蛤で、目鼻と思い、口と思うのが蛤で、そして灯が蛤である。

襟か袖かであるらしく、且つ暗の綾の、薄紫の影が籠む。

時にかたかたと響いて、二三人で捧げ持った気勢がして、婦の袖の香立蔽い、船に柱の用意があって、空を包んで、トンと据えたは、屋根船の屋根めいて、それも漆の塗の艶、星の如き

唐草の蒔絵が散った。左舷右舷も青貝摺。

六蔵は雛壇で見て覚えのある車のようだ、と偶と思う。

時に、蛤が口を開いた。否、提灯が、真珠の灯を向けたのである、六の顔へ——そして女の声で言った。

「これが俳優なの？」

「まあ。」

「醜い俳優だわね。」

——ままにしろ、此奴等——と心の裡で、六蔵は苦り切る。

「まだ、来ていやしまいと思ったのに、」

「そして、寝ているんだもの、情のない。」

「心中の対手の方が、さきへ来て寝ているなんて。」

「ねえ、」

と応じて、呆れたように云った、と思うと、ざっと浪が鳴って、潮が退いたらしく寂寞する。

欄干も、屋根も、はっと消えて、蒔絵も星も真の暗闇。

直ぐに、ひたひた、と跫音して、誰か舷へ来たらしい。

透通るような声が、露に濡れて、もの優しい湿を帯びつつ、

「……巽さん。」

途端に、はっと衣の香と、冷い黒髪の薫がした。

「ああれ、違って……違っているよう。」

十三

蛤の灯がほんのりと、再来て……

「お退きよ、退いておくれよ。」

「よう、お前。」

と言う。……人をつけ、蛤なんぞに、お前呼ばわりをされる兄哥でないぞよ。

「此処は、今夜用がある。」

「大事の処なんだから。」

「よう。」

「仕ようがない。ね、酔っぱらって。」

「臭い事。」

「憎らしい、松葉で突ついて遣りましょう。」

敏捷い、お転婆なのが、すっと幹をかけて枝に登った。呀、松の中に蛤が、明く真珠を振向ける、と一時、一時、雨の如く松葉が灌ぐ。

「お、痛。」

「何うしたの。」と下から云う。

松の上なが、興がった声をして、

「松葉が私を擽るわよ、おほほ、おほほ。」

「わはは。」と浜の松が、枝を揺って哄と笑う。

「きゃッ。」と我ながら猿のような声して笑って、六蔵はむっくと起きて、

「姉等、仕立ものの用はねえか。」と、きょとんとして四辺を視た。

浅葱を飜す白浪や。

燃ゆるが如き緋の裳、浪にすっくと小雪の姿。あの、顔の色、瞳の艶、――恋に死ぬ身は美しや、島田のままの星である。

蛤が六つ七つ、むらむらと渚を泳いで、左右を照らす、真珠の光。

凄じいほど気高い顔が、一目、怨めしそうに六蔵の面を視て、さしうつむいて、頸白く、羅の両袖を胸に犇と掻合す、と見ると浪が打ち、打ち重って、裳を包み、帯を消し、胸をかくし、島田髷の浮んだ上に、白い潮がさらり、と立つ。と磯際の高波は、何とてそのまま沖に退くべき。

颯と寄る浪がしら、雪なす獅子の毛の如く、別荘の二階を包んで、真蒼に光る、と見る、とこの小舟は揺上って、松の梢に、ゆらりと乗るや、尾張を越して富士山が向うに見えて、六蔵

素天辺に仰天した。

這奴横紙を破っても、縦に舟を漕ぐ事能わず、剰え櫓櫂もない。

「わああ、助けてくれ、助船。」

「何うしました、何うした。」

人目を忍んで、暗夜を宮歳と二人で来た、巽は船のへりに立つと、突然跳起きて大手を拡げて、且つ船から転がり出した六蔵のために驚かされた。

菩提所の——巽は既に詣ではしたが——其処ではない。別荘の釣舟は、海に溺れた小雪が魂をのせた墓である。

「小雪さんを私と思って。」……

あの、船で手を取って、あわれ、生命掛けた恋人の、口ずから、切めて、最愛い、と云って欲い、可哀相とだけも聞かし給え。

御神燈は未だ白かったのに、夜の暗さ、別荘の門、街道も寝静まる、夢地を辿る心地して、宮歳のかよわい手に、辰吉は袖を引かれて来たのであった。

「へい、仕立ものの御用はねえかね。」

きよろん、とした六蔵より、巽が却って茫然とした。

宮歳の姿は、潮の香の漾う如く消えたのである。

別荘の主人池川の云うのには、その宮歳は、小雪と姉妹のように仲のよかった芸妓である。

内証ながら、山田の御師、何某にひかされて、成程、現に師匠をしている、が、それは、山田の廓、新道の、俗に螢小路と云う処に媚かしく、意気である。

言語道断、昨夜急に二見ヶ浦へ引越して来る筈はない！

扨て翌朝の事であった。

電話で、新道の一茶屋へ、宮歳の消息を聞合せると、ぶらぶら病で寝ていたが、昨日急に、変が変って世を去った。

――写真を抱いていましたよ、死際に薄化粧して……巽さんによろしく……――

その時、別荘の座敷の色は、二見ヶ浦の、海の蒼いよりも藍であった。

簾に寄る白浪は、雪の降るより尚お冷い。

その朝、六歳も別荘の客の一人であった。が、お先ばしりで、衆と一所に、草の径を、幻の跡を尋ねた――確に此処ぞ、と云う処に、常夏がはらはら咲いて、草の根の露に濡れつつ、白檀の蒔絵の、あわれに潮にすさんだ折櫛が――その絵の螢が幽に照った。

松に舫った釣舟は、主人の情で、別荘の庭に草を植え、薄、刈萱、女郎花、桔梗の露に燈籠を点して、一つ、二見の名所である。

（『新小説』一九一六［大正五］年四月号）

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選・特別篇　鏡花百物語集」ちくま文庫、筑摩書房
　2009（平成21）年7月10日第1刷発行
初出：「新小説」
　1916（大正5）年4月号
※「一寸」に対するルビの「ちゃと」と「ちょっと」の混在は、底本通りです。
入力：門田裕志
校正：砂場清隆
2018年9月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

浮舟

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/